

「大腸癌診療マニュアル」

自治医科大学助教授・消化器一般外科 小西 文雄 著

藤田保健衛生大学教授・消化器外科

丸 田 守 人

「大腸癌診療マニュアル」は一言ですばらしい本である。著者は序の中で、“一般外科の修練過程にある若い外科医を対象に書いた”と述べているが、とんでもない誤りである。大腸癌を専門にしていると自負している医師もこの本を読んで必ず得るところがあり、明日から実際に役立つはずである。すなわち、大腸癌のどの方面から診療にかかわるにしても、本書の内容はすべての臨床医によって重要な知識であり、第一線の現場で役立ち、最良の医療の基となることばかりである。大腸癌の診断では検診の普及による拾い上げ、診察の仕方、注腸造影および内視鏡検査、超音波検査などの細かなことだが絶対に必要なことのみを、箇条書きにして極めてわかりやすくまとめている。大腸癌の病態の理解には病理が必要で、病理所見の項目だけでなく必要な部分では肉眼像、ルーベ像、弱拡大あるいは強拡大の顕微鏡像を示して理解しやすく工夫されている。

また、大腸癌の治療では早期癌の治療方針とその具体的な方法から始

まって、進行大腸癌を結腸と直腸に分け、特に直腸癌では選択する術式の適応を明確にし、日常の診療でしばしば遭遇するイレウスを起こしている進行癌の治療方針とその実際など大腸癌の治療については全体に痒いところに手が届くように書かれている。もし本書のとおり手術をすれば最高の医療を患者に提供することができることであろう。後半では大腸癌患者の術後 follow-up の仕方、術後の遠隔転移再発症例の対処とその方法、化学療法および放射線療法などについても極めて実践的に具体的に、要点を理解しやすく書かれているのは、著者がどれだけ多くの患者を直接診療しているか、その豊富な経験に負うところ大である。

もとより本書の成り立ちは著者、小西文雄先生の St. Mark's 病院の留学から始まって、国際的なアカデミズムとともに外来診察、内視鏡検査、腹腔鏡下手術、手術と摘出標本の処理、そして病理の鏡検などすべて自分が納得するまでの実践に対する熱意と努力が積み重ねられた結果として、約2年の年月を要して生ま

れた力作である。本書は小西文雄先生の実地医療に還元されるアカデミズムを貫いた深い知識、および患者に与える最高水準の最新の技術を普遍化させるための愛情ある手引書となった。本書の特徴のもう1つは、読みながら重要と思われる文章にアンダーラインを引いてみると、すべての文章にアンダーラインが引いてしまうことである。それほどにむだがなく、全頁が大切なことばかりで埋まっている出色のマニュアルである。(one point lecture) が5か所にあり、ここでは最新の大腸癌に対する情報を理解しやすく説明してくれているのも嬉しい。

近年増加している大腸癌にかかわる第一線の多くの医師にとって、絶対読まねばならない、そして読んで日々の診療で実践してほしいと思うので心から推薦する。

● A 5 頁 168 図 57 写真 42
カラー写真 23 色図 9 表 32
1998 定価(本体 4,500 円+税)
〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)